

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 朱俊銘

①学習成果

「人文社会学はどのようにエコロジー・スタディーズに貢献できるか」というテーマを考えていくうちに、自分の勉強したい専門分野をより広い視点から見つめ直しました。日本文学と環境は一見全く異なる学問のようですが、実は古くから深く関わり合っていて、学際的な研究も少なからずされていることに気づきました。科学の知識だけで社会構築は成り立たない一方、人文学だけの力では問題解決に力不足なところも多々あります。となると、今日の研究は他の分野とのコラボレーションの重要性を実感しました。今回の派遣を通して違う国の人々がいかに学際的な学問や研究を進めているのかを垣間見ることができました。その上、これからの勉強や研究にもベクトルを変えて考えることができるようになった気がします。

②海外での経験

ヨーロッパは初めてで、着いて真っ先に実感したのはEUという連合体の強いつながりです。入管の手続きや両替なしでEUの国々を自由自在に行き来することができると思っていましたが、フランスにあるストラスブール市内の路面電車に表示されていた行き先はドイツの地名だったり、お世話になったストラスブール大学の先生はドイツに住んでいたりするなど「越境」を肌で感じました。それに加えて、ストラスブールという町は古くから要塞都市とされていて独仏がそれぞれ領有していた時期もありました。これは、欧州評議会がストラスブールに設立された理由の一つともなっているでしょう。国と国との間の戦争と平和、そしてその文化の融合も、当地で実際に見ながら考える機会を与えられました。

③プログラム内容

ハイデルベルク大学のワークショップについてお話ししたいと思います。ハイデルベルク大学の院生が大変興味深い発表ばかりをしてくださいましたが、個人的に最も印象的な2つ以外は割愛させていただきます。1つ目は、LGBTと環境問題を繋げる(Queer ecology)についての発表でした。発表者は、日本のLGBTの社会運動(とりわけ、同性結婚を巡るの)は環境運動を参考にして更なる権利の追求ができると主張しました。実際にネットワークや集団的需要、社会問題としての認識、経済・政治的な圧力といった角度から、日本の状況を分析してくださって、斬新かつ明瞭なる見解をお聞きしました。もう1つは、バジャウ族(Bajau)の保護とその問題についての発表でした。無国籍でインドネシア周辺にいる水上生活者であるバジャウ族は、政府などによって決められた海洋保護区(MPAs)などの環境政策に立ち向かって困難を面しています。責任免除などが規定されていますが、活動範囲や公的な場における発言力は限られている上、文化的に理解されていない部分もあります。外国の有志たちが手伝おうとしてもバジャウ族の立場から考えていない場合も少なからず、その独特性が保たれにくい状態となっています。バジャウ族については完全に知らなかったため、当然ながらおもしろく伺いましたが、その上、先進国の人として世界問題を解決するときには往々にして先入観によって良いことをしていると思ひ込むことが多いようで、多様性を尊重しながらほかの文化背景を理解・保護するのも不可欠だということを教えてもらいました。

④進路への影響

本来、日本文学の研究を続けていくとしたら、学界の状況や資料の質と量、一次性を考慮し、海外留学などは自分と無縁だろうと思っていましたが、今回、ハイデルベルク大学で歌論を専門としておられる先生にお会いできて、日本の学界には実証主義に偏りすぎる上、外国の文献をあまり重んじていないというところもあると伺いました。すると、やはり自分の認識してきた研究方法などは唯一でなく、今後たとえ海外で滞在せずとも海外の学界動向にも注目に値すべきだと、研究の態度などについて再考を促してもらいました。